

2-7					
主題	高齢化、重度化に対応した入浴サロンの実施がもたらす心身の効果の研究				
副題	ご入居者様に入浴で簡単にできる五感への働きかけの実践				
キーワード 1	入浴サロン	キーワード 2	五感への刺激	研究(実践)期間	6ヶ月

法人名・事業所名	社福) 東京玉葉会 特別養護老人ホーム第二青陽園				
発表者(職種)	近藤勝幸(介護職員)				
共同研究(実践)者	阿部正福(介護職員)				

電話	042-654-1301	FAX	042-654-8828		
----	--------------	-----	--------------	--	--

事業所紹介	東京都八王子市の「社会福祉法人東京玉葉会 特別養護老人ホーム 第二青陽園」は、今年の6月に開設4周年を迎えた施設です。自然豊かでゆったりとした環境でユニットケアを実施しています(入所90名・ショート10名)。ご利用者一人一人を尊重し、ご家族の皆様とも連携を取り、個々に合ったサービスを提供することに日々努めています。また、昨年からは腰装着型ロボット HAL を導入。職員の腰への負担軽減にも取り組んでいます。				
-------	--	--	--	--	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

開設4年目を迎え、入居者の年齢進行に伴い活動量の低下傾向に身体機能の変化が見られ始めている。生活リハビリや、余暇活動への参加機会をつくり、残存能力の維持を極力図っているものの、加齢や疾病等を起因とした廃用性症候群を発症し、覚醒不良、睡眠不足、食事摂取量低下などの症状が入居者に多く見られるようになった。中でも筋力低下や、関節拘縮によって座位保持、立位保持が困難となった入居者は、入浴形式を個浴からストレッチャー浴(以下、機械浴)へと移行せざる得なくなり、現在では個浴人数を上回っている状態である。また、鬱や、認知症の進行に伴う精神面の低下により、余暇活動への参加機会も減少、他者との社会的な関わりが少なくなり、心を閉ざし、ベッド臥床が長時間となる入居者も多くなっており、このようなケースは今後も増加することが予想される。廃用性症候群を抱えた重度入居者に対し、心身の残存機能に働きかける取り組みを行うことがユニットケアとしての課題となっていた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

入居者の重度化においても、定期的な交流ができる場として機械浴での入浴時間を余暇と兼ね備えた使い方に変えられないか着目した。これまでの入浴は洗身、処置、更衣といった、一連の業務の流れによることが主で、癒しや、楽しみに感じられたか疑問であった。今後、確実に増えるだろう機械浴において入居者が楽しむことができ、活性化させる場とすることができないかと考えたのが「入浴サロン」である。重度入居者の視、聴、嗅、味、触という「五感」の刺激により、脳の働きが活性化することで、生きる力を呼び起こせるのではないかと期待し、研究することを主眼とした。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ・対象者：機械浴で入浴される入居者 11 名(スタンダード車椅子使用者：8名、ティルト式車椅子使用者：3名)。

- ・実施期間：平成29年1月から6月(現在も継続中)
- ・回数：1回/週(月・木のどちらかで実施)
- ・実施時間：約20分から30分/1人
- ・サロン実施時の職員数：3名
- ・取り組み手順

入居者及び、家族から聞き取りの協力を得た結果、テーマとして決定したのが「良き思い出」「馴染みの音」「香り、嗜好」「現在の個々の身体機能」「悩み」である。湯上りの楽しみ、入浴のサロン化と位置づけ、入湯から湯上りまで従来の入浴と違ったワクワクできる、また行きたい雰囲気づくりをコンセプトとする。

- ①入浴気分や、季節を感じ取れるしつらえを施し、音楽・映像・アロマ機材を設置。
 - ②ヒーリング音楽を流しながら入浴する。
 - ③入浴後は、アロマを焚いたフロアで症状に合わせたマッサージを実施。
 - ④メニューボードの中から好きな飲み物を選択、意向に添った大画面テレビを観ながら飲んでもらう。
- 上記、②から④の一連の流れでは、相手の目を見て、沢山の声掛けをすることを心掛け、覚醒を促すと共に、入居者とマンツーマンで関わりながら様子観察を行うようにした。

《4. 取り組みの結果》

- ①スタンダード車椅子使用者8名中、3名の覚醒時間の向上がみられ座位姿勢が安定した。
- ②一部介助で召し上がっていたN様が、自力摂取でほぼ全量召し上がられた。
- ③不穏で独語が続いていたK様、MK様、U様、Y様が朝まで良眠された。
- ④発語が少なかったS様、MH様、U様が笑顔の増加や、発語が増え意思表示を示すようになった。

《5. 考察、まとめ》

本研究では、五感の中で、いずれかの残存機能に働きかけた結果として「覚醒状態の向上」、「心身への活性化」につながったと考えられる。入居者個々の様々な情報、状態を把握し、どうすれば喜んでくれるのか、どんな言葉で反応し、癒されるのだろう、と言う相手を思いやる気持ちを持って接することが重要である。ユニットケアの本質は一人ひとりが望んでいる暮らしをサポートする「個別ケア」である。それは画一的でなく、身体状況、それに伴う生活スタイルと共に変化していく。普遍的なのはその人の尊厳を保つこと、大事にしてきた暮らしや思い出、生活習慣を大切にすることではないのかと本研究で学ぶことが出来た。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

マッサージ指導 日本工学院八王子専門学校 医療カレッジ 鍼灸科 科長 宇南山 伸

<http://health-to-you.jp/dementia/tattiserapi-64663/> 「認知の症状が劇的改善！タッチセラピー、ハンドマッサージの方法」(2017年6月7日閲覧)

《8. 提案と発信》

これまでパブリックスペースは、園行事や、月数回のクラブ活動で使用しているが、重度化の入居者の参加が少なく、また、活動予定がない日は、ユニット内で過ごすことが多かった。

そこで、皆さんがその人らしい生活の実現を目指し、誰もが、親しく、ふれあい、団欒できて自由に行き来できるスペースを入居者の意向に合わせて、これからもつくりあげていきたい。